

The Gallery voice NO-68

編集・発行／ 画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 番地／TEL (098)888-6117 / 2023.3.15
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa Japan www.galleryokinawa.com

稲嶺盛吉の琉球ガラス

河西 大地

琉球ガラスといえば「泡ガラス」をイメージする方も多いが、泡が頻繁に入れられるようになったのは比較的最近、1980年代後半のことである。ガラスに含まれる泡は、不純物混入や窯焚きの甘さから発生し、かつては疎まれるものであった。また逆に、意図的に泡をつくる技法も古来おこなわれてきた。とはいえ、現代の沖縄のガラス工芸ほど多種多様な泡ガラスを常用する地域は、他のどこにも見当たらない。

なぜ、沖縄に泡ガラス製品が多いのか。お察しのとおり、沖縄を訪れる観光客にとってガラスに浮かんだ泡の群は、南国の美しい海の思い出そのものなのである。



稲嶺盛吉「泡ガラス」

歴史をひもとくと、泡ガラスの造形にとことんこだわり抜いたガラス職人・稲嶺盛吉の影響が見えてくる。表現としての泡ガラスを様式化することに成功した氏こそが、琉球ガラス業界全体に泡ガラスの流行を生み、結果として泡ガラスの普及に寄与することになった。



稲嶺盛吉「氷入れ」

1940年那覇に生まれた稲嶺盛吉は、16歳で与儀の奥原硝子製造所に見習いに入った。戦前と同じ漬物瓶・薬瓶・ランプのホヤなどの生活雑器を製造したこの工場が、現在30軒以上ある琉球ガラス工場の「技術面」での源流である。18歳で移った牧港ガラス工場では、擬洋風の製品、つまり「デザイン面」での琉球ガラスの本流が育まれつつあった。時代はアメリカ統治期。アメリカ人からのオーダーを受けて、海外製の廃瓶を原料にカラフルなガラス食器や飾り物を製造したのだ。

その後の沖縄のガラス製品は、手づくりの日用品の美しさを大切にする民藝と、鮮やかでエキゾチックな観光土産物という、2つの方向性が並行して求められた。前者は賞賛されもしたが、後者は沖縄県民の本音からすれば、理解しがたいものとなっていった。

70年代には客層がアメリカ人から日本本土の観光客へと移り変わり、「琉球ガラス」という呼称が定着する。製品ジャンルは枝分かれして増え、80年代には内地のセンスと技術を取り入れることで美術工芸品のジャンルが成立した。



稲嶺盛吉「茶碗」

稲嶺盛吉もまた、そういった激動の歴史を他の職人たちと共に歩み、創り上げていった。美術工芸品において自己表現の可能性を泡ガラスに賭けることを決意した80年代の末頃には、泡をまんべんなく混ぜた、民藝の味わいを宿した食器類を多く制作した。それが、労働大臣指定「現代の名工」を受章する90年代中頃以降、これでもかというほど大量の細かな気泡を盛り重ねた大ぶりの花器を制作するようになる。モナコ公国から名誉賞を授与される等、国内外から高い評価を受けるようになるのはこの頃である。ガラス素材で陶芸的な表現を目指した、ともいわれる。

現在の稲嶺盛吉の作品は、趣によって2つに大別できる。ひとつは、民藝の温もりが残る日用雑器。もうひとつは、技法を凝らした美術工芸品だ。いずれも原料に新しい原料ガラスは使わず、リサイクルの廃瓶ガラスを使用する。伝統の抛り所の揺るぎないものをそこに認めているからだ。

2000年代に入って稲嶺盛吉が編み出した独自の技法に「土紋」がある。赤土を表面に熔着し、ヒビ割れ模様成形する。ざらざらとした太古の野性と、平たい繊細な克己とを併せもつような、とても不思議な趣を表出するその技法は、門下にのみ受け継がれている。

ところで、3年前にご本人にお会いしたとき、「今のガラス瓶は、瓶自体（品質が）良くなってしまって、同じように溶かしてつくっても、昔の風合は出ないね」と、内緒話を打ち明けるようにお茶目に苦笑いながら話してくれた。ふと、稲嶺盛吉のつくる泡は、幾重にも混ざり合う異質な泡の集積なのかもしれないと思った。

(琉球ガラス史研究者/かさいだいち)

【稲嶺盛吉 略歴】

- 1940年 那覇市寄宮生まれ
- 1956年 奥原硝子製造所に見習いとして入る。
その後、牧港ガラス工場、なにわガラス工芸社、ぎやまん館、琉球ガラス村でガラス製品製作に従事。
- 1988年 宙吹ガラス工房「虹」設立
- 1990年 沖縄県知事認定 優秀技能賞
- 1994年 「現代の名工」受章
- 1998年 沖縄タイムス芸術選賞 大賞
- 1999年 栃木県美術展 栃木県文化振興協議会会長賞
- 2001年 パドヴァ国際芸術見本市 聖アントニウス芸術大賞
- 2002年 スtockホルム平和展 平和貢献賞
モナコ日本芸術文化展 モナコ公国名誉賞
- 2005年 中国現代国際美術展 芸術功労賞
- 2006年 「ほむらガラス工芸館」開設
「読谷山土紋ガラス」稲嶺盛吉展 開催



稲嶺盛吉「土紋花器壺」

「シュール」に生きた画家

大嶺信一

上原 誠勇

今回の美術オークションに画家、大嶺信一（1915～1984）油彩画2点が出品されている。6号の小ぶりな作品であるが、妙に引き付けられる。腰まで流れる長い髪をした女はデフォルメされ異様なほど大きな手が髪をなでる。強調された手と左肩腕、露出した肩に安らぐように頬をあてている。目を閉じ、自己の内面と対話しているかのようだ。女像のバックには色鮮やかな装飾的ハーフトーンのモザイク画面が花びらのように乱舞する。作家の対象へのオマージュとして描かれた事が想像される。画面左下方にサインと1974が記されている。

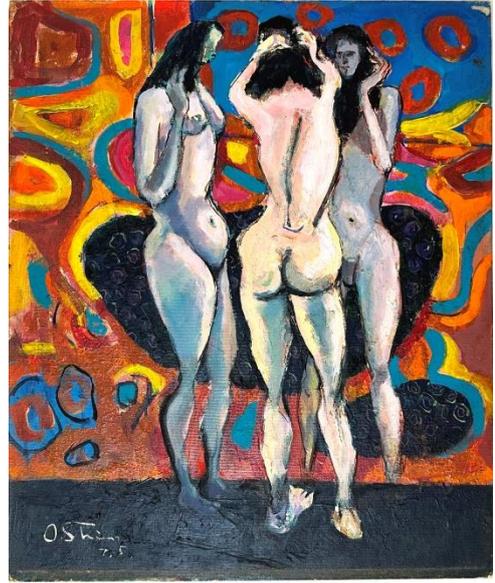


大嶺信一（油彩・1974年）

もうひとつの8号の作品は、女三人の立像が描かれている。太めのラインで抽象化され、エネルギーギッシュに構成された背景。身体各部位が強調されデフォルメされながらも、その腰の動きや手の当て方など、動きとリズムが画面から伝わる。女三人が集い語り合い、会話が聞こえてくるようだ。画面左下方にサインと75が記されている。1975年の作品と思われる。

沖縄が戦後1945年に始まる米軍統治時代を経て、72年の日本復帰「世代わり」、75年の国際海洋博覧会開催等、開発にともなう自然破壊や経済の本土資本進出、各種団体の日本「系列化」が進み、美術界も同様に系列化されていった。沖縄の社会がざわめき、揺れ動いていた。これらの作品が描かれたのはそのような時代である。

The Gallery Voice No-68.2023.3.15 画廊沖縄



大嶺信一（油彩・1975年）

筆者は73年4月、大嶺信一主宰の「エンブリオ美術研究所」の門をたたいた。那覇の久茂地交差点、58号線沿い名渡山ビル2階にエンブリオ美術研究所はあった。画塾生には、昼は小中学生、夜間は大人、特に女性が多かったと記憶している。

その日は日頃の油画制作や石膏デッサンとは違い「人体デッサン」の日であった。裸体モデル女性が目の前に現れ、目のやり場に困り、しばしデッサンの鉛筆が止まった。エンブリオ美術研究所はそのような本格的な研究所だった。子どもから一般の大人、美大受験生や活躍中の画家まで学ぶ幅広い研究生が在籍していた。

大嶺信一は、60年代にポップな新聞コラージュ作品を制作し、以後女性の人体をモチーフにしたシュールな作品が多くみられる。晩年の80年前後から無機質な三角定規と有機質の卵を画面に取り入れ、独特なシュールリアリズム世界を構築した。大嶺信一の作品は沖縄県立博物館・美術館にも所蔵され、観る機会は少なくない。代表的な作品「繁殖の季節」（油彩F100号・1975年）や「作品77」（油彩F60号・1977）は、沖縄美術史の中でシュールリアリズム先駆として語られる山元恵一（1913～1977）の作品と比較すると、前者がアカデミックな形而上のシュールに対して大嶺は形而下のリアルな場から立ち上がっているように思われる。今後、画家大嶺信一のさらなる調査、研究が進められ、回顧展が開催されることを期待したい。

（画廊沖縄代表/うへはらせいゆう）

第26回美術オークション作品一覧

The Gallery Voice No-68.2023.3.15 画廊沖縄

No.	作品画像	作家名	タイトル	No.	作品画像	作家名	タイトル
1		與那覇朝大	「明ける」	25		末吉安久	「Okinawa」 「沖縄戦後のお店」
2		名渡山愛擴	「伊豆見の櫻」	26		不明	
3		玉城栄一	「春のばら園」	27		石嶺傳郎	「旭日」
4		玉城栄一	「板馬漁港」	28		翁長自修	「ハーリー糸満」
5		與那覇朝大	「映」	29		仲嶺康輝	「波涛」
6		與那覇朝大	「桂林」	30		大浜用光	「古裂」作品II-37
7		仁王	大皿	31		大浜英治	「恋人のいる街」
8		小橋川源慶	緑釉大壺	32		官良瑛子	「裸婦」
9		中村徹	「でいご」	33		官良瑛子	「裸婦」
10		仁王	山水紋抱瓶	34		玉那覇有公	「松竹梅と海老」
11		島常賀	龍巻壺	35		田中興八	「オンフルール」
12		屋良朝春		36		当山進	「時」
13		稲嶺盛吉	花瓶	37		渡慶次真由	
14		稲嶺盛吉	氷入れ	38		鳥海青児 ※鑑定書なし	「上り口説(ぬぶいくどうち)」
15		稲嶺盛吉	ボウル(大)	39		鳥海青児 ※鑑定書なし	「醜童(しゅんどう)」
16		稲嶺盛吉	ボウル(中)	40		鳥海青児 ※鑑定書なし	
17		稲嶺盛吉	ボウル(小)	41		大嶺信一	
18		稲嶺盛吉	茶碗	42		大嶺信一	
19		稲嶺盛吉	グラス6個セット	43		稲嶺盛吉	土紋花器壺
20		稲嶺盛吉	泡ガラス酒器セット (徳利1、グラス4)	44		島袋常明	黒釉掻落エジプト文
21		亘保次郎	シーサー	45		屋良朝春	「東平安名崎」
22		金城次郎	蛸抜き魚文大壺	46		國吉清尚	徳利
23		中村徹	「壺屋風景」				
24		大城皓也					

* SNS 等での掲載はお控えください。